Topics｜公益社団法人日本都市計画学会北海道支部

苫前暮らし体験ツアー～冬編～開催報告

小西 信義 公益社団法人 日本都市計画学会 北海道支部

1. はじめに

令和元年11月に開催された北海道支部2019年度研究発表会にてテーマ部門（持続的なまちづくり）優秀賞を受賞した、「苫前町まちづくり企画」の受賞後の取り組みについてご報告したいと思います。発表会の演題でもあった、「流雪溝を舞台としたまちづくりの挑戦」はいかに展開されているのでしょうか。

2.「ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱﾂｰﾘｽﾞﾑ」から「ｲﾝﾌﾗﾂｰﾘｽﾞﾑ」へ

（1）苫前町古丹別地区流雪溝について

留萌管内の苫前町古丹別地区流雪溝は供用から 20 年が経過し、投雪の担い手の高齢化などの社会背景の影響を受け、投雪が滞っている家屋や堆雪による交通障害が散見されるといった課題が指摘されています。このような経緯から、2016 年 10 月に町内若手有志からなる「苫前町まちづくり企画」（以下、「彼ら」）の活動の一環として、当該流雪溝の課題解消を目的にさまざまな取り組みを行ってきました。

（2）「ｲﾝﾌﾗﾂｰﾘｽﾞﾑ」を取り入れてみる。

取り組み内容のひとつとして、彼らは域外から投雪ボランティアを受け入れを行ってきました。倶知安町や岩見沢市などで先行的に展開されている「除雪ボランティアツアー」をヒントに、同様の取り組みを流雪溝に置き換え、16 年度から 4 冬期実践してきました。これらの取り組みでは、域外の雪処理の担い手を受け入れる域内の受入力（受援力）の強化に一定の効果を得たものの、なかなか参加者を増やすことができませんでした。大きな理由としては、都市部からの距離があるため、宿泊を伴うことからどうしても参加費が増え、「ボランティアなのにそこまでお金は出せない」と参加者が尻込みしてしまうことが挙げられます。

そこで、彼らは投雪作業ひいてはこの取り組み自体を「ボランティアツアー」としてではなく、参加者の学びや苫前町のことを深く知っていただく機会としてポリッシュアップさせる方向へと転換させました。その際援用した概念が「インフラツーリズム」でした。

彼らは、令和元年 11 月には室蘭市白鳥大橋を見学したり、有志たちで町建設課から流雪溝の説明を聴き、「インフラツーリズム」の理解を深めました。また、12 月には篠原靖氏（跡見学園女子大学准教授）を講師に招き、30 名程度の町民と一緒に「インフラツーリズム」の学びを共有し、流雪溝は苫前の冬の暮らしの映しであり、投雪作業をはじめとする街のプレゼンテーションをすることで、関係人口が構築できるだろうという気付きに至りました。

町建設課職員から流雪溝の仕組みを聴いたり、「インフラツーリズム」の勉強会を行った。

3.「苫前暮らし体験ツアー～冬編～」

令和 2 年 2 月 15 日～16 日、いよいよツアー当日を迎えました。町建設課職員からは流雪溝関連施設、苫前漁港では屈強な漁師たちが漁師の暮らしをプレゼンテーションしてくれました。夜の交流会では農家・エゾシカ猟師も参加し、苫前の山海の幸を囲みながら、大いに苫前を語りました。また、彼らは投雪作業を域外の参加者への指導役も率先し、町内外のいろいろな人たちが流雪溝に集い、汗を流しながら、町のことを考える 1 泊 2 日を自ら演出しました。

投雪作業は町内外の人びとの交流の場となり、地元漁師からはミズタコ漁の説明をしてもらう。

域外からの参加者は目標人数には達しませんでしたが、「苫前のファンになってしまう」という仕掛けが盛りだくさんのツアーに磨き上げられました。プログラムごとで交代する「街のヒーロー」こそが、関係人口の構築に必要不可欠なエッセンスなのでしょう。

流雪溝の課題のみならず、地方部の課題は山積しています。もちろんこのツアーがすべてを解決できるほど単純な課題ではありません。まずは、このツアーに関わった人たちが、町のコミュニティこそが「インフラのインフラ」であることを感じとるところからが、課題解決の第一歩となるのではないでしょうか。